

《市作連職員研修会》

昨年の11月1日、横浜市障害者地域作業所連絡会(以下、市作連と略す)の職員研修にて、市作連会長の佐藤文明氏から横浜市における障害者地域作業所の役割や市作連が果してきた成果・作業所の職員としての心構え等が話された。

佐藤会長の話された内容としては、作業所が立ち上がった際には、補助金が年間290万円しかなく、職員に社会保険さえ掛けられないほどの底賃金であり、それでも必死に働いて、ようやく慣れた頃には、結婚適齢期となり、先方の親から「娘と結婚したかったら、作業所なんか辞めて、もう少し賃金の高い場所で働いて欲しい。」と言われ、作業所を辞めざるを得なかった。しかし、その後の市作連を始めとする長きに渡る運動の成果により、職員の身分保障を訴える中で、補助金額も増加していき、それまでは作業所の職員や所長を親が担っていたが、職員に世代交代して行った。作業所も、設立当初は家賃も高く、作業所によっては、プレハブを余儀なくされたり、せっかく賃貸に入れても、場所が狭くて使い勝手が悪く、家賃補助を切実に訴えていく中で、家賃補助金が開始され、着実な運動を積み重ねていくうちに増額されて行った。また、重度の障害者を受け入れていく中で、特別介助加算も開始された。今後も一人一人の声をぜひ市作連に反映させて行きたいと語られた。

また、職員としての心構えとして、自分は23歳から法人施設に勤めて来た中で、その苦い体験の中から、利用者を叱るだけでは心が離れていくだけで、誉める事も大切だと語っていた。2つ目に職員として大切な事は、こうした研修会に積極的に参加して様々な知識を得て、マンネリズムに陥らない事である。また、生活保護制度の改悪、社会保障施策の動向が危うい中で、新聞などを読んで情報を得る事も大切であると話された。

横浜市も、財政難の中で以前のような障害者地域作業所ではなく、最低でも特定非営利活動法人が必要であり、「これからの新設は大変だと思う。」等々が語られた。

佐藤会長の講演が終わると、続いて第2部のグループディスカッションが行われた。その中で、私が入ったグループでは、佐藤会長が「体育会系出の私としては、最初は怒ってばかりの私だったが、ある日を境に利用者を誉めるようになったら、心が通い始めた。」とそこに気がついた佐藤会長の着眼点は素晴らしいという意見や障害者の場合は幼い時から、周囲の大人達から常に頑張れとか怒られてばかり、また「ありがとう」と言われた事があまりないので、それも伝えていく事が大切。その他には、自分達の作業所の担う支援の課題が出されたが、課題山積である。

本当は、各グループに報告して欲しいところだが、時間的な制約もある中で、1グループだけ報告を行った。「誉めるところから、信頼関係が生まれたという佐藤会長はやはり素晴らしい。」との意見は他のグループからも出されたようであった。

本当に活発なグループディスカッションが繰り広げられた。今回の職員研修は若手職員や中堅職員に対する佐藤会長のオマージュだったような気がする。

市作連研修部長 石本 隆司